

「NOWPAP 海洋生物多様性保全地域行動計画 (NOWPAP RAP BIO) に関するワークショップ及び CEARAC 海洋生物多様性保全中期戦略 (CEARAC BIO MTS) に関するワークショップ」の報告

2019年11月28-29日、CEARACは千葉県でNOWPAPメンバー国の専門家を交えてNOWPAP海洋生物多様性保全地域行動計画(RAP BIO)に関するワークショップ及びCEARAC海洋生物多様性保全中期戦略(BIO MTS)に関するワークショップを開催しました。

11月28日のRAP BIOワークショップでは国際コンサルタントのDr. David Coatesが出席できなかったことからNOWPAP RCUのDr. Ning Liuが会合を進行しました。まず、ワークショップの趣旨及びDr. Coatesが作成したディスカッションペーパーの内容を説明し、その後、NOWPAPメンバー国の専門家が各国の海洋生物多様性関連活動を紹介しました。続いて出席者がディスカッションペーパーの内容について検討・意見を述べ、必要に応じて情報を追加しました。出席者からは以下のような意見が示されました。

- －各NOWPAPメンバー国の生物多様性戦略に基づくRAP BIOを策定すべきである。RAP BIOの活動を始める前に各国の戦略を確認し、メンバー間の共通事項を把握すべきである。
- －RAP BIOの策定に当たっては、愛知目標やSDGsなど、グローバルターゲットを踏まえるべきである。2020年には中国でCBD COP15が開催される予定であり、「ポスト2020目標」が合意されることから、新たなグローバルターゲットも視野に入れるべきである。
- －生態系サービスに対する評価は海洋生物多様性保全における重要な項目の1つであるが、NOWPAPではこれまで、生態系サービスに関する経済的、社会的評価に関する経験が乏しい。
- －NOWPAP地域でのこれまでの生物多様性関連の活動では、データ不足を理由にトレンド評価ができないことがあった。

議論の後、出席者がRAP BIO策定の活動計画及びスケジュールを変更することを了承しました。ディスカッションペーパーは会合で示された意見を盛り込み、内容を変更し、第24回NOWPAP政府間会合(2020年2月)に提出されます。本プロジェクト予算(30,000USドル)の内、15,000ドルが残っており、これを活用して2020年夏に改めてワークショップを開催することになりました。RCU、全RACの代表、Dr. Coates及び各国専門家が出席し、RAP BIO最終草案をとりまとめ、2020年に開催される第25回政府間会合に提案することを目指します。順調に進めば、2021年末には政府間で採択されることが期待されます。

11月29日にはCEARAC BIO MTSに関するワークショップを開催し、MTSに関して最終確認を行いました。CEARAC BIO MTSは各国のレビューを受けた後、第24回政府間会合で合意されることとなります。

2020-2021年の活動計画についても意見交換を行いました。午前中のセッションではCEARACの2020-2021年の新プロジェクトである干潟・塩性湿地分布評価に関して、各国の干潟・塩性湿地に関する情報を共有し、活動計画案が合意されました。オーストラリアのジェームズクック大学Dr. Nicholas Murrayは人工衛星によるグローバル干潟マッピングツールを開発したこの分野の第一人

者です。Dr. Murray が開発したツールを、CEARAC のプロジェクトに活用していくことで同博士と連携していくことを予定しています。ワークショップにはウェブ会議を通じて出席し、地球規模の干潟マッピングツール開発の経緯を紹介されたほか、CEARAC プロジェクトについても有益な提案をいただきました。他の出席者も同博士が開発したツールの有用性を確認し、CEARAC プロジェクトへの協力を求めました。

次に、各国の専門家が自国の干潟・塩性湿地の分布について発表を行いました。NOWPAP 地域内では、黄海に面する中国及び韓国沿岸域に広大な干潟が分布しています。日本の場合、干潟の多くは瀬戸内海や有明海に分布しています。ロシア沿岸域には干潟がほとんどなく、NOWPAP 地域の北部、タタール海峡付近に広い潮間帯域が分布しているとの情報が紹介されました。2020-2021 年の CEARAC 活動について検討し、以下の活動計画が合意されました。

- －2020 年に CEARAC 事務局が Dr. Murray と連携し、衛星画像を利用して干潟・塩性湿地マップ案を作成する。各国の専門家がこれを確認し、自国のデータ・情報を基にマップを修正する。
- －2021 年には、1980 年代からの分布の変遷マップを作成する。干潟・塩性湿地の消失の評価に当たっては、DINRAC が 2018-2019 年に作成する NOWPAP 地域の埋立・干拓に関する報告書を活用し、NOWPAP 海域における人間活動の影響評価を行う。

午後のセッションではもう 1 つのプロジェクトである環境 DNA について情報共有、技術研修の実施に関する意見交換を行いました。各国の専門家から自国での環境 DNA 技術の活用現状について報告がされました。日本はこの分野をリードしており、環境 DNA を活用した調査研究に関して多くの知見を有しています。魚類のメタバーコードのデータベース (MiFish) が開発され、日本全国の沿岸域での出現魚種の調査が実施されたことなどが報告されました。中国ではカラシラサギの保全に環境 DNA が利用されています。環境 DNA を利用してカラシラサギの個体数や性別の調査が行われています。韓国では環境 DNA を用いて植物プランクトン及び動物プランクトンの分布調査が行われています。ロシアでは、環境 DNA の利用が始まったばかりで、植物プランクトンのモニタリングでの活用が始まっています。各国で環境 DNA の活用が始まっていますが、その技術レベルには隔たりがあることから、環境 DNA 分析手法に関する研修の実施及び共通マニュアルの開発を 2020-2021 年に実施することが同意されました。第 1 回研修は 2021 年春に神戸大学で実施する予定です。

本ワークショップで挙げられた意見を踏まえ、2020-2021 年の活動計画を作成し、2020 年夏ごろに予定している第 18 回 CEARAC フォーカルポイント会合に提案する予定です。

2022 年以降の CEARAC 活動についても、次の 2 か年の活動を通じて引き続き意見交換していくこととなりました。